

南部家旧蔵群書類従本「散木奇歌集」の輪郭

よむうちにとしよりぬべしながみのさとりえがたき事のおほくて

(了阿法師)

源俊頼の家集「散木奇歌集」の伝本研究は早く関根慶子によって行われ、校本と作品研究を付してまとめられた^(注一)。その後、関根は所蔵の阿波国文庫旧蔵本を底本に新たな校本を提供し、諸注を集成し補注として自身の読解を添えた「集注篇」で「散木奇歌集」研究の基礎を築いたのである^(注二)。これに続いて、「散木奇歌集」の伝本は平澤五郎によって網羅的に内部の調査が行われ、類従本系と大野本系とに大別する関根の分類を再確認しつつ、四類に分かれたが、平澤は契沖書写本を精査し、かつ伝本それぞれの本文を細部にわたって精密に比較検討することによって明らかになった各伝本の本文生成の由来と伝来、転写の過程からこれを導き出し、その本文の具体そのものとともに示したのであった^(注三)。さらに近くは草稿本的といわれる冷泉家時雨亭文庫蔵安貞二年藤原定家他筆の「源木工集」が影印されたが、その伝本としての位置はまだ十分に明らかではない^(注四)。

かような研究状況の中にあつて、現在確認できる「散木奇歌集」の伝本は、明らかに存在したことを確認できながら現存しないものや上記の諸論に取り上げられなかったものを含めると、五十本を超えるであろう^(注五)。これらのうち現存するものは、他の多くの作品も同様であるうが、格段に古い定家他筆を除いて、そのほとんどが江戸期に分散し、ことに江戸後期に写され、また明治に及んでいる。江戸中期以降の多くの伝本が多少なりとも契沖書写本と群書類従本の影響下にあ

ることともその特徴といえるだろう。本稿は、こうした中にあつて、いささか特異な、しかしいかにも江戸後期的な流転の末に成立した一伝本について考察するものである。

一

旧南部邸に設けられた盛岡市中央公民館は南部家旧蔵の文書と典籍を収蔵するが、その中にそれぞれ二部ずつの「散木奇歌集」と「散木奇歌集標注」を見出すことができる。これは旧蔵者の「散木奇歌集」への関心の高さを示すものであろう。そのうち、二部の「散木奇歌集」は群書類従本とその写本である。しかし、単なる群書類従本とその写本ではなく、全冊にわたって傍線、傍点の類、校異や頭書、また注などを施した群書類従本と、一見その群書類従本をこれらの書込みを含めそのまま正確に書写したかと思われる、いわば副本とも見える写本である^(注七)。また、後述するように、書込みはその本来が小山田与清のものであると思われる。この二部は、これらの諸点から、また写す→移すという行為そのものにおいて、さらには作品を読み、書物を使うという点からも、注意すべき伝本である。

初めに書誌的事項を略記する。

山 田 洋 嗣

I (群書類従)

函架番号 和0177 南部家旧蔵 印記、前遊紙表右上に「さく／ら園」、右下に「養^(括力)牀／座右／之書」、第二丁表中央右寄り上部に「奥御／蔵書」(／は改行を示す。以下同)。

赤茶布目紙表紙(後補)、楮紙袋綴、刊三冊、寸法 二六・五×一七・九cm 全二二丁(上八一、中六九、下五七、下卷末余四)。外題「散木奇譚集 上(中・下)」(後補題簽、表紙左上)、内題「群書類従卷第二百五十四上／檢校保己一集／和歌部百九^{家集二十七}／散木奇譚集第一」(端作)。奥書「右散木奇譚集以織部正乘尹本校合了／群書類従卷第二百五十四下」。後補前遊紙表に「与清」識語、全巻にわたり、行の左右に朱の傍点、傍線、朱、墨の書入れ、上欄外に朱と墨の頭書標注等を付す。巻末に四丁分の紙を補い、俊頼の勅撰集入集歌のうち五四首、万代集入集歌八首を追加する。語注を記す貼紙三紙あり(いずれも朱、本文同筆)。各冊前遊紙裏にはその冊の部立を頭に朱の丸を添えて記し、本文部立名の上に○、△(いずれも朱)を見出しとして付す。また巻初の丁の端には朱で目印を記し、また各冊端作「群書類従卷第二百五十四上(中・下)／檢校保己一集／和歌部百九家集二十七」を朱線で囲んでいる。書入れは上巻と中・下巻の二筆、ないし巻ごとの三筆によるとみられる。なお、中巻の筆跡は次掲写本の筆跡に似ているように見える。

II (群書類従本写本)

函架番号 和0178 南部家旧蔵 印記、前遊紙表右下に「とき／は園」。

薄茶横目模様紙表紙(原表紙か)、楮紙袋綴、江戸末期写三冊、寸法 二七・四×一九・〇cm 外題「散木奇哥集 上(中・下)」(題簽、表紙中央、但し左上に剥離痕)。この他は細部を除いてIにほぼ同じであり、特に群書類従本文との字形の相似など、I(群書類従)の臨模のごとくに見える写本である。

識語は次の通りである。清濁、漢字かなの別、行配りなどものとままたに翻字した。与清曰散木集は其頃の俗諺及古き物語など

よせたれば今に成ては弁かたきふしおほかりこは
類聚名義抄字鏡集などに据て其詞をもとめ

家集髓脳等にわたりて其古事の証を求

むへし曾丹集出観集為忠家両度百首次郎百首

夫木^(字余マツ)拾玉集山家集草根集などこれを助くる

ことおほし(以下余白)

両冊の蔵書印のうち、「養^(括力)牀／座右／之書」は未詳。「奥御／蔵書」は南部家旧蔵本にかなりの数がみられる印記で、藩主のそれであろう。「さく／ら園」、「とき／は園」の二類は印面の趣、印形、大きさなど相似しており、両者につながりのあることをうかがわせるが、前者は盛岡藩第十四代藩主の南部利剛、後者はその室南部明子のものである。南部利剛には家集『桜園集』^(注八)があり、南部明子は「常磐園」を称し、「殿の桜園集のさまにならひつ、まやかなる家集にあみなさはや」として編んだという『常磐園集』^(注九)がある。同じ南部家旧蔵本の「五部合集」の奥には「明治廿四年夏六月／喚犬喚鶏屋永好之写本をもつて／うつしけるは／常盤園明子也」とあり、同筆「栄花物語拔書」には「とき／は園」印があるから、このように判断されるのである。南部明子は水戸徳川家、徳川斉昭の女で、和歌にすぐれ、その師は前田夏蔭、間宮永好、同八十子、久米幹文、江刺常久らであった。^(注十)すなわち、この二冊のうち、群書類従本は南部利剛の、群書類従写本が南部明子の蔵書であると考えられるのである。^(注十一)

二

「与清」の識語と書入れは両本とも小山田与清筆ではないが、傍線等も含め、まず与清のものとみてよいであろう。^(注十二)蔵書を徹底的に利用して、校異や注、考証を加え、識語を記すなどするのは、当時の和学者にみられるところであるが、与清においても甚だしく、この本の傍線、傍点の施し方、また頭書や注など、そ

の手になるものとみて差し支えないと思われる。^(注十四)

書き込みは多様でしかも多く、それらが互いに重なっているところも多い。冒頭部分をもつて示してみると、まず、端作三行は朱の直線で囲み、集名に付けられた見出しとしての朱の圈点や三角点、最初の歌と二番歌にあるような朱書と墨書の集付、随所に見られる朱、墨二様の校異やミセケチによる修正、他本との校異は異本である意味の「イ」を付けるものと付けられないものがあり、他歌書にあるものはその歌書の名を添えた異同が記されている。さらに、仮名表記へのあて漢字、「松に待つを添ふ」のような簡単な墨書の注意書き、上欄外への朱と墨の頭書、標注、また〇―の記号が見られる。傍線や傍点の類はさらに複雑で、朱によつて傍点と波線が行の左右に引かれ、左右に圈点があり、また右側に引かれる直線があり、傍点とも波線ともつかないものがある、というように非常に煩雑である。この状態を冒頭部分、第一丁の和歌について示せば次のようになる。ゴシック体で記すのが群書類従本文、その近傍に書入れを記し、歌頭に『新編国歌大観』の番号を付す。

南部家旧蔵本の記号類 1

堀川院御時百首哥めしけるに元日の心をつかふまつれる

「堀川院御時百首哥」右傍点(朱)

「元日の心」右傍点(朱)

「哥」の下に「をイ」を補入(朱)

「つかふ」の「ふ」をミセケチ(朱)し「うイ」と訂(朱)

「まつれる」の「れる」をミセケチ(朱)し「りける」と訂(墨)

1庭もせにひきつらなれるもろ人のたちあるかけや千世の初春

和歌右肩に「玉葉集上」と注記(朱)

「庭もせに」に右波線

「ひきつらなれるもろ人」に左波線(朱)

「もろ人のたちある」に右波線(朱)

「たちある」に左圈点(朱)

「千世の初春」に右波線(朱)

「千世」の「世」に「代イ」と傍記(朱)

立春日よめる

「立春」の「春」右下に「の」を補入(朱)

「よめる」の「る」をミセケチ(朱)し「りける」と訂(朱)

2いつしかと今朝は氷もとけにけりいかてみきはに春をしるらん 1才

和歌右肩集付の下に「雑春」と補記(朱)

「いつしかと」に右傍点(朱)

「いかて」に右傍点(朱)

「みきはに春をしる」に左傍点(朱)

朝原霞をよめる

「朝原」の「朝」「原」右下にそれぞれ「の」を補入(朱)

3春のくるあしたの原を見わたせば霞もけふそ立はしめける

和歌右肩集付の下に「春上」と補記(朱)

「あしたの原」に右直線(朱)

一日の日のあしたにかゝみをみてよめる

「一日の日」に右傍点(不明瞭)

「一日」右に「朔」と傍記(墨)

「一日の日」を左引出線ではさみ「朔日」と左に傍記(朱)

「よめる」の「め」をミセケチ(朱)し「み付け」と訂(朱)

この行の上に「此カ、ミハ次ノ哥ニ云／カ、ミト別ニテ常ノ鏡／也」(墨)

4身ひとつはこしつともなき年なれと老のすかたはさき立にけり

「こしつともなき」に右傍点(朱)

「としなれと」に右傍点(朱)

「老のすかたは」に左傍点(朱)

顕仲の君の八条の家に人々あつまりて十首哥よみけるに霞の心をよめる

「顕仲の君」に右波線（朱）

「君の」の「の」の下に引出線（朱）「イ下文ハ八条トアリ」と傍記（朱）

「八条の家」に左直線（朱）

「十首哥よみけるに」に右波線

「十首」（行末）の下に「のイ」と注記（朱）

「よみけるに」の「み」の下に補入記号（朱小圏点）と引出線を付し

「侍」と傍記（朱）

「よめる」の「め」の下に補入記号（朱小圏点）と引出線（朱）を付

し「りけ」と傍記（朱）

5 いくつかと末の松山かすめるはなにと、もにや春もこゆらん

「いくつかと」に右波線（朱）

「いくつかと」右に「新千春上」と集付（朱）

「いくつかと」左に「万代春上」と集付（墨）

「末の松山」に左直線（朱）

「春も」の「も」右に「のイ」と傍記（朱）

和歌上部欄外に「貧道集 立春哥／いくつかと末のまつ山／かすめるはな
みと、も／にやはるのこゆらん／教長卿は聊後輩ナレハ／此散木ノ哥ヲト
レルト／モ云ヘケレトサアラシ／全暗合ト云ヘシ」（墨）

はかための鏡のおしきのしきものに書つけ侍ける

「はかための鏡」に右傍点（朱）

「はかため」の「は」右傍に「齒」と傍記（墨）

「鏡」に左圏点（朱）

「おしきのしきもの」に右傍点（朱）（不明瞭）

「おしき」の右に「折敷」と傍記（墨）

「おしき」の「お」をミセケチ（朱圏点）し引出線を用いて左に「を」

と訂（朱）

6 われをのみ世にも、ちぬの鏡草さきさかへたる影そうかへる

「も、ちぬの鏡草」に右傍点（朱）

「鏡草」に左傍点（不明瞭）（朱）

「さきさかへたる」に右圏点（朱）

「、ちぬ」の「ぬ」に朱小圏点を付してミセケチし引出線（朱）を付して
左に「ひ」と傍記（朱）

和歌上部欄外に「○」印（朱）、その左に「齒固の／鏡餅の折敷」（朱）

和歌上部欄外に「用ハモチヒノ仮名ナル／コト経衡集二モ二首／ヨメル証
アリ」（墨）

和歌上部欄外に「永久百首元日／俊頼／けふよりは我をもち／ひのます
か、みうれし／きかけをうつしてそ／みる」（墨）

和歌一首を解体するかのよう、言葉やそのまとまりに注意が向けられている
ことを知ることができるであろう。それはほとんど網羅的と言ってもいいくらい
であって、必ずしも和歌的なものあるいは俊頼的なものに対してだけではない。

二一

以下、「書き込む」という行為の跡として、これらの特徴と意味とを考えてみ
たい。行の左右にある記号類について、冒頭より第十一丁裏までを記号の種類別
にまとめてみると次のようである。^{（注十五）} それぞれその記号がどこに付けられている
かを、その付けられている部分を抜き出すことで示す。その下の括弧の中は、順
に丁数、表裏、行数、新編国歌大観番号である。なお、筆を引きずったためか
と思われる傍点が波線か判断に迷うものなど、分明でないものもあるのでそれも項
目としたが、なおゆれるところがある。疑問のあるところには？を付記する。

南部家旧蔵本の記号類2

・右傍点(朱)(明瞭なもの)

堀川院御時百首哥(6・歌一詞)／元日の心(1才6・歌一詞)／いつしかと(1才6・歌二)／いかて(1才6・歌二)／おしき?(1ウ8・歌六詞)／**もちゐの鏡草**(1ウ9・歌六)／**御はかため**○(1ウ10・歌七詞)／かすみの衣(2才4・歌八)／なみたてる松(2才7・歌一〇)／くもてにて(2才7・歌一〇)／かすみの衣(2ウ1・歌一二)／きぬ(2ウ7・歌一五)／殿下(2ウ9・歌一七詞)／かすならぬ身(3才7・歌一九)／むつきのはつねの日ねいみと(3才8・歌二〇詞)／こかひ(3才10・歌二〇詞)／えひら(3才10・歌二〇詞)／初子のいみに(3ウ3・歌二〇)／雪ふれは二葉の松も花さき(4才3・歌二四)／な、くさのな(4才6・歌二六詞)／ゑこのうね^れ(4才8・歌二六)／つみしなへて(4才8・歌二六)／**そのの(そのみため?)**(4才8・歌二六)／みたに(ふかきみたに?)(4才10・歌二七)／いしみゆすりて(いしみゆすりてあらふねせり?)(4才10・歌二七)／心ひろさ(4ウ5・歌二九)／なけのなさけ(4ウ5・歌二九)／卯杖(4ウ6・歌三〇詞)／おいらくのこしふたへなる身(4ウ8・歌三〇)／はとのあるつえ(4ウ10・歌三一)／夜こし(5才2・歌三二)／な、草のなつなの(5才2・歌三二)／卯杖(5才6・歌三四詞)／山のけはしさ(5ウ7・歌三四)／う杖(5ウ7・歌三四)／はつ卯の杖(5ウ9・歌三五)／つくくと(5ウ9・歌三五)／人の(人のかり?)(5ウ10・歌三六詞)／うつえ(5ウ1・歌三六)／よろほへる老のすかたを(5ウ1・歌三六)／あをむまひく(5ウ2・歌三七詞)／ひく(ひく駒の? ひく駒の松のみとりの色なれば?)(5ウ4・歌三七)／あかつきかゆ(5ウ5・歌三八詞)／兼盛か集(5ウ6・7・歌三八詞)／しみこほり(6才6・歌四二)／いつしかの杜(6才8・歌四三)／こゑならす(6才8・歌四三)／しるし(6才10・歌四四)／かすならぬ身(6ウ6・歌四七)／谷かくれ(6ウ8・歌四八)

南部家旧蔵群書類従本「散木奇歌集」の輪郭(山田)

・左傍点(朱)

／歌絵(7才3・歌五四詞)／もてはやす(8才3・歌六一)／もかり舟(9才1・歌六四)／河そひ柳(9才1・歌六四)／心まとひは(9ウ5・歌七三)／**風のはふり**(9ウ7・歌七五)／まゆふのぬさを(9ウ10・歌七七)／**中宮の御堂の八重桜**(10才1・歌七八詞)／ぬひめなく八重かさなれる花(10才3・歌七八)／谷ふところに(10ウ4・歌八三)／そよめて(10ウ4・歌八三)／霞にまかふ桜(10ウ6・歌八四)／かへさ(10ウ8・歌八五)／かはらけ取(10ウ10・歌八六詞)／花の梢(花の梢に旅ゐして?)(11才2・歌八六)／なみたてる桜(11才5・歌八七)／**中宮の御堂の八重桜**(11才6・歌八八詞)／仲実(11才6・歌八八詞)／不明瞭なもの

一日の日(1ウ3・歌四詞)／こしつともなき年なれと(1ウ4・歌四)／**十首の哥よみけるに**(1ウ5・6・歌五詞)／いつしかと(1ウ7・歌五)／**はかため鏡**(1ウ8・歌六詞)／おしきのしきもの?(1ウ8・歌六詞)／ますか、み(2才1・歌七)／きみか御かけ(2才1・歌七)

・左傍点(朱)

ほそ谷河を(ほそ谷河をおひにして?)(2ウ1・歌一二)／あしみのこまに(あしみのこまにをしへゆく?)(2ウ10・歌一七)／ねいみと(ねいみといひて家をいて、野にいきて?)(2ウ9・歌二〇詞)／はゆるゑこのうね(4才8・歌二六)／なつなの花を(5才2・歌三二)／けは(けはしさに?)(5才7・歌三四)／かり(5才10・歌三六詞)／花のすかた(5ウ1・歌三六)／かゆ(5ウ5・歌三八詞)／ほつ、しめなは(9才1・歌六四)／ぬさ(9ウ10・歌七七)／風そよめきて(10才4・歌八三)／不明瞭なもの

みきはに春をしる(1才10・歌二)／老のすかたは(1ウ4・歌四)／**鏡草**(1ウ9・歌六)／**はかため**(1ウ10・歌七詞)／御かけ(2才1・歌七)／けりな(2ウ5・歌一四)／明暮に(2ウ7・歌一五)／むせふ(2ウ7・歌一五)／いみ(3ウ3・歌二〇)／**みためそ**(4才8・歌二六)

／心さしふかき(4才10・歌二七)／ためて(4才10・歌二七)／ねせり
 (4才10・歌二七)／卯日(5才5・歌三四詞)／老のすかた(5才1・
 歌三六)／まなくふれとも(6才2・歌四〇)／隙もとむらん(7才10・
 歌五二)／梅のたちえ(8才5・歌五七)／くして(11才7・歌八八詞)
 ・右波線(朱)

庭もせに(1才8・歌二)／もろ人のたちある(1才8・歌二)／千世の
 初春(1才8・歌二)／顕仲の君(1才5・歌五詞)／なこり(2才1・
 歌七)／摂政殿下にて(2才2・歌八詞)／十首の哥よませ(2才2・歌
 八詞)／長実卿(2才8・哥一詞)／霞にうつもれ(2才2・歌一三)
 ／いつしかと(2才5・歌一四)／まかふ(2才5・歌一四)／あへぬ
 (2才7・歌一五)／うこかさりけり(2才8・歌一六)／をしへゆく(2
 才10・歌一七)／こころほそくあはれなる事(3才5・歌一九詞)／かへ
 りことにいひつかはし(3才5・歌一九詞)／花さかぬみ山かくれ(3才
 7・歌一九)／ひねもすに(3才9・歌二〇詞)／かやをかり(3才10・
 歌二〇詞)／ことのもとなは(3才1・歌二〇詞)／なをさりに(3才
 2・歌二〇詞)／袖のしたなる小松(3才3・歌二〇)／かこと(3才6・
 歌二二)／身のあやしさをおもひ(3才7・歌二二詞)／あやしさに(3
 才9・歌二二)／引人もなし(3才9・歌二二)／いはひつゝ、(4才1・
 歌二三)／つみそへて(4才5・歌二五)／袖のしほれぬる(4才5・歌
 二五)／仲実(4才6・歌二六詞)／あらふねせり(4才10・歌二七)／
 卯杖をつきて(4才8・歌三〇)／わかかなをそ摘(4才8・歌三〇)／た
 のもしきかな(4才10・歌三二)／しのひませ(5才2・歌三二)／身に
 つめる年を(5才4・歌三三)／ましかは(5才4・歌三三)／むつきの
 一日卯日(5才5・歌三四詞)／はつうの日(5才8・歌三五詞)／年の
 つもりぬる(5才9・歌三五)／はつ春のもち月にもるかゆ(5才8・歌
 三八)／なへてならす(5才8・歌三八)／あは雪(6才2・歌四〇)／
 衣手のうすきや冬のせき(6才5・歌四二)／花のあたりをそことつけな

ん(6才10・歌四四)／なつかしき(6才2・歌四五)／つれ／＼になく
 うくひすの声(6才10・歌四九)／外に友なかりけり(6才10・歌四九)
 ／春雨はふりしむれとも(7才3・歌五〇)／こゑはしほれぬ物にそ(こ
 ゑはしほれぬ物?) (7才3・歌五〇)／すけなき(7才8・歌五一)／
 かさにゆふ(7才8・歌五二)／あくかれて(7才10・歌五二)／とはま
 し物を(7才1・歌五三)／大殿(7才2・歌五四詞)／哥によみなして
 (7才3・4・歌五四詞)／屋のつま(7才4・歌五四詞)／なをし(7
 才6・歌五四詞)／おさなきちこ(7才6・歌五四詞)／かさねぬさき(7
 才8・歌五四)／やみにかこへとも(7才10・歌五五)／香はなかれてや
 せにかほるらん(8才3・歌五六)／俊忠(8才4・歌五七詞)／たちえ
 (8才5・歌五七)／心もゆきてかさなる(8才7・歌五八)／かきこし
 に吹くる風(8才1・歌六〇)／花のありか(8才1・歌六〇)／空に知
 かな(8才1・歌六〇)／影をもそへめ(8才3・歌六一)／さためなけ
 れは(8才5・歌六二)／くして(8才6・歌六三詞)／しめなは(9才1・
 歌六四)／いまたさかざる花(9才3・歌六五詞)／滝のしら糸(9才6・
 歌六六)／顕季卿(9才7・歌六七詞)／花こそ春のしるし也けれ(9才9・
 歌六七)／水のほかに浪はたちけり(9才1・歌六九)／しからみ(9
 才2・歌七〇)／あたりの空に(9才2・歌七〇)／ふりけん袖のなこり
 (9才3・歌七二)／しら雲のみねこす風(9才4・歌七二)／谷に花そ
 散(9才4・歌七二)／せりつみしことをいはし(9才6・歌七四)／
 花の夕はへ(9才6・歌七四)／さらすや花の盛(9才10・歌七七)／春
 も梢にきくは咲けり(10才3・歌七八)／きくといへはやはやはさかぬ桜
 はな(10才5・歌七九)／仲実(10才8・歌八一詞)／花みる人もいとひ
 けり(10才10・歌八一)／こかくれて(10才4・歌八三)／まどふ(10才8・
 歌八五)／花見ありきて(10才9・歌八六詞)／さけなとたへけるついて
 に(10才10・歌八六詞)／旅ゐして(傍点「花の梢に旅ゐして」?) (11
 才2・歌八六)／心もこと葉もめてたさに(11才7・歌八八詞)／八重桜

(11才9・歌八八)／けかる、身のほ(けかる、身のほと?) (11才9・歌八八)／色みれは桜なれともかさなれるけしきはやへの山ふき (11才9・歌八九)

・左波線(朱)

ひきつらなれるもろ人(1才8・歌二)／思ふさまにて(2才1・歌七)／御かけ(2才1・歌七)／四方の空(2才4・歌八)／やかて(やかても?) (2才5・歌九)／しつえ(2才7・歌九)／いそすなみの音(2才9・歌一一)／おひにして? (2才1・歌一二)／長実卿(2才3・歌一四詞)／みえまかふまで(2才5・歌一四)／松の梢はうこかさりけり(2才8・歌二六)／をしへゆく? (2才10・歌一七)／よもの山辺(2才1・歌一八詞)／み山かくれ(3才7・歌一九)／ゐくらし(3才9・歌二〇詞)／こかひするおりにえひらといふなる物(3才10・歌二〇詞)／松をなをさりにひきて(3才11・2・歌二〇詞)／別当実行(3才4・歌二一詞)／ふもとのをの(3才6・歌二二)／かみにまかせて(3才6・歌二二)／はつねの日(3才7・歌二三詞)／あやしさを(3才7・歌二三詞)／初子はくれと引人もなし(3才9・歌二三)／はつ子そ春のはしめ(4才1・歌二三)／よはひをのへに(4才3・歌二四)／二葉の松も花さき(4才3・歌二四)／わかになつみそへて(4才5・歌二五)／しほれぬる(4才5・歌二五)／のみためそ(のみため?) (4才8・歌二六)／たくひな(たくひなき?) (4才5・歌二九)／七日卯杖にあたり(4才6・歌三〇詞)／経兼(4才6・歌三〇詞)／こしふたへなる身(4才8・歌三〇)／つえにすかりて(4才10・歌三一)／けふぞしる(5才7・歌三四)／とへかしな(5才1・歌三六)／すかられて(5才1・歌三六)／みとりの色な(みとりの色?) (5才4・歌三七)／千とせをすくす(5才4・歌三七)／もち月にもるかゆ(5才8・歌三八)／雪のむら消(6才4・歌四二)／冬のせき(6才5・歌四二)／いと、(6才5・歌四二)／待つて(6才8・歌四三)／たま、に(6才8・歌四三)／

あたり(6才10・歌四四)／なん(6才10・歌四四)／友なかりけり(6才10・歌四九)／哥つかまつりけるに(7才1・歌五〇詞)／ふりしむれとも(7才3・歌五〇)／しほれぬ物にそ(7才3・歌五〇)／をのか、きねをあくかれて(7才10・歌五二)／隙もとむらん(7才10・歌五二)／おほしく(7才3・歌五四詞)／つま(7才4・歌五四詞)／むかひゐて(7才6・7・歌五四詞)／色をはやみにかこへとも(7才10・歌五五)／国朝臣(顕国朝臣?) (8才1・歌五六)／こゑの色さへ(8才9・歌五九)／ありか(8才1・歌六〇)／なひく柳のさためなれば(8才5・歌六二)／見ありきけるに(8才6・7・歌六三詞)／かせになみよる(9才1・歌六四)／めくむ(9才4・歌六五)／けしき(9才4・歌六五)／なつかしき(9才4・歌六五)／すきまをわけて尋れは(9才9・歌六七)／あらしやは霞もつらし散そむるはな(9才10・歌六八)／たちへたて(9才10・歌六八)／風をいたみ(9才3・歌七二)／た、よふ(9才4・歌七二)／夕はへ(9才6・歌七四)／こん世にも(9才8・歌七六)／むつる、(9才8・歌七六)／顯季(10才1・歌七八詞)／八重かさなれる花(10才3・歌七八)／やへやはさかぬ桜はな(10才5・歌七九)／いとひけり(10才10・歌八二)／やうく暮ぬる程に(10才9・10・歌八六詞)／花見の御幸(11才3・歌八七詞)／身のほと思ひもしらす(11才9・歌八八)／かさなれる(11才10・歌八九)／はやへの山ふきのほな(やへの山ふきのはな) (11才10・歌八九)

・右圈点(朱)

さきさかへたる(1才8・歌六)／たに(2才7・歌一五)／霞にむせふ(2才7・歌一五)／子日して(3才6・歌二二)／うね(4才8・歌二六)／しなへて(4才8・歌二六)／みたに(4才10・歌二七)／すかりて(4才10・歌二二)／しむれとも(7才3・歌五〇)／まよのあまりに隙もとむらん(7才10・歌五二)／いたみ(9才2・歌七二)／すきまあらすな(9才7・歌七五)／おりたかへてもおもひける哉(10才5・歌七九)

・左圈点(朱)

たちゐる(1才8・歌二)／鏡(1ウ8・歌六詞)／宿所(2才3・歌一四詞)
 ／**はつねの日**(3才8・歌二〇詞)／たひゐして(3ウ3・歌二〇)／ち
 こ(7ウ6・歌五四詞)／こかくれて(10ウ4・歌八三)／けしき(11才
 10・歌八九)

・右直線(朱)

あしたの原(1ウ2・歌三)／さほ山(2才4・歌八)／むろのやし(2
 才5・歌九)／天の橋(2才7・歌一〇)／いもせ山(2ウ1・歌一二)
 ／吉野山(2ウ2・歌一三)／白河の宿(2ウ3・歌一四詞)／塩かまの
 うら(2ウ3・歌一四)／まの、はき原(2ウ7・歌一五)／音羽山(2
 ウ8・歌一六)／ふはの関(2ウ10・歌一七)／田上なる所(3才4・歌
 一九詞)／かすか山(3ウ6・歌二二)／**春日野**(4才5・歌二五)／**か
 すか野**(4ウ3・歌二八)／いつきの宮(5ウ2・歌三七詞)／をはつせ
 山(6才4・歌四二)／いつしかの杜(6才7・歌四三詞)／東北院(7
 才4・歌五一詞)／法成寺(8才6・歌六三詞)／賀陽院(9才5・歌
 六六詞、詞書に「賀陽院殿」)／まつらの山(9ウ3・歌七二)／きそち
 の桜(9ウ7・歌七五)／神山(9ウ10・歌七七)／みかさの山(10才7・
 歌八〇)／斎院(10ウ1・歌八二詞)／おいそのもり(10ウ2・歌八二)
 ／ふしのけふり(10ウ6・歌八四)／北山の辺(10ウ9・歌八六詞)／鳥羽
 殿の花見の御幸(11才3・歌八七詞)

・左直線(朱)

八条の家(1ウ5・歌五詞)／末の松山(1ウ7・歌五)／**八条の家**(2
 才8・歌一一詞)／六条の家(3ウ4・歌二二詞)／をかみ河(4才8・
 歌二六)／**風のはふりに**(9ウ7・歌七五)／**御堂の八重桜**(10才1・歌
 七八詞、詞書に「中宮の御堂の八重桜」)／あつまち(10ウ2・歌八三)
 ／**御堂の八重桜**(11才6・歌八八詞、詞書に「中宮の御堂の八重桜」)

俊頼の和歌に特有の珍しい語や表現に記号が付されるのは勿論だが、「南部家
 旧蔵本の記号類1」同様、それを超えてより広範囲に語や語句、それも物、事、
 事柄、それらが組み合わされてあるまとまりとなった表現、人名、地名、所など
 様々なものが見られ、それらはどの記号にもわたっている。目印を記したいくつ
 かのように、複数出ているものもあり、同じあるいは同様のものがところにより
 異なる記号を付けられている場合もある。一つだけはっきり意味を認められるの
 は、直線が名所、地名、居所、またはそれに準ずるものを表わしていることである。
 これらに異なる記号が付けられることはない。しかし、それとて記号の別に意味
 を見ようとするのは無理であり、要するに適宜振り分けて左右を利用して注意し
 たい部分に注意をひくだけの役割を与えた記号を付けているという他はない。左
 右の別も、例えば重複している部分ができたり、上下に続いてしまったりして見
 にくくなるのを避けるためには右だけですまなくなったために行われた処置であ
 る^(金十)。これは当然、記号をもって目印としたい部分がそれほど多かったという
 ことであり、一つの部分に二種類の関心が寄せられることがあるということでも
 ある。

二二

朱の頭書、上欄外書入れ、はほぼすべてにその下の家集本文に傍点、傍線など
 の記号を付けられたそれに相当するものを見出すことができる。それは次のよう
 である。〇―といった記号や振り仮名、清濁などはそのまま、頭書をゴシック
 体で掲げ、これまでと同様にその位置を丁数、歌番号などで表わして、頭書に相
 当する部分とその部分を、記号の種別を「―」内に示しつつ列挙する。／は改
 行を示し、傍線を施したのは相当部分がない例外の部分である。

南部家本の上欄外朱書入れ

〇―／歯固の／鏡餅の折敷(1ウ)

歌六詞「はかための鏡のおしき」「はかための鏡」に右傍点(朱)、「おしき」に右傍点(朱)・右に「折敷」と傍記(墨)・「お」に小圈点(朱)を付し左に引出線を付して「を」と傍記(朱)、「鏡」に左圈点(朱)〇

〇／宿所(2ウ)

歌一四詞「宿所」「左圈点(朱)」

〇―だに(2ウ)

歌一五「たに」「右圈点(朱)」

あしみの駒／あせみ歌⁷(2ウ)

歌一七「あしみのこま」「左傍点(朱)」

ねいみ(3オ)

歌二〇詞「むつきのはつねの日ねいみと」「右傍点(朱)」・「ねいみといひて家をいて、野にいきて」「左傍点(朱)」

こがひのえびら(3オ)

歌二〇詞「こかひ」「右傍点(朱)」・「えひら」「右傍点(朱)」・「こかひするおりにえひらといふなる物」「左波線(朱)」

〇―いはひつ、(4オ)

歌二三「いはひつ、」「右波線(朱)」

松も花咲(4オ)

歌二四「雪ふれは二葉の松も花さき」「右傍点(朱)」・「二葉の松も花さき」「左波線(朱)」

七艸(4オ)……歌二六詞「な、くさのな」「右傍点(朱)」

〇―ゑこのうね(4オ)

歌二六「ゑこのうね」「右傍点(朱)」・「うね」「右圈点(朱)」

〇―うぎ(?)

歌二六「むつき」「右に「うきつ」と朱書・左に「うきえ夫木」と墨書」

ゑこのうねは／恵具の生たる／田のうねにや(4オ)

歌二六「ゑこのうね」「右傍点(朱)」・「うね」「右圈点(朱)」

〇つみしなえ(4オ)

歌二六「つみしなへて」「右傍点(朱)」・「なへて(しなへて?)」「右圈点(朱)」

〇そこ(4オ)

歌二六「そのの(そののみため?)」「右傍点(朱)」

いしみゆすりて(4オ)

「いしみゆすりて(いしみゆすりてあらふねせり?)」「右傍点(朱)」

心ひろさ(4ウ)

歌二九「心ひろさ」「右傍点(朱)」

なけのなさけ(4ウ)

歌二九「なけのなさけ」「右傍点(朱)」

腰二重なる身(4ウ)

歌三〇「こしふたへなる身(おいらくのこしふたへなる身?)」「右傍点(朱)」

鳩のある杖(4ウ)

歌三一「はとのあるつえ」「右傍点(朱)」

七草のなつな(5オ)

歌三二「な、草のなつなの花」「右傍点(朱)」

ましかば(5オ)

歌三三「ましかば」「右波線(朱) 右傍点(朱)?」

けはし(5オ)

歌三四「山のけはしき」「右傍点(朱)」・「けはしきに」「左傍点(朱)?」

つくくと(5オ)

歌三五「つくくと」「右傍点(朱)」

よろほへる老の跡(5ウ)

歌三六「よろほへる老のすかたを」「右傍点(朱)」

赤豆粥(5ウ)

歌三八詞「あかつきかゆ(あつきかゆイ)」[右傍点(朱)]

正月十五日粥(5ウ)

歌三八詞「記号ナシ」

冬の関(6オ)

歌四二「冬のせき」[左波線(朱)]・「衣手のうすきや冬のせき」[右波線(朱)]

しみこほり(6オ)

歌四二「しみこほり」[右傍点(朱)]

すけなき(7オ)

歌五一「すけなき」[右波線(朱)]

鶯笠(7オ)

歌五一「かさにゆふ」[右波線(朱)]

まやの／あまり(7オ)

歌五二「やまのあまりに隙もとむらん」[右圈点(朱)]

哥絵(7ウ)

歌五三詞「哥絵」[右傍点(朱)]

○／哥によみ／なして(7ウ)

歌五三詞「哥によみなして」[右波線(朱)]

○／ちこ(7ウ)

歌五三詞「ちこ」[左圈点(朱)]・「おさなきちこ」[右波線(朱)]

やみにかこへども(7ウ)

歌五五「やみにかこへとも」[右波線(朱)]・「色をはやみにかこへとも」

[左波線(朱)]

紅梅(8オ)

歌五九詞「紅梅」[記号ナシ]

○／紅の梅(8オ)

歌五九「くれなるの梅」[右傍点(朱)]

こゑの色(8オ)

歌五九「こゑの色」[左波線(朱)]

もてはやす(8ウ)

歌六一「もてはやす」[右傍点(朱)]・「はやす」[左波線(朱)]

なひく柳の／定なければ(8ウ)

歌六二「なひく柳のさためなければ」[左波線(朱)]・「さためなければ」

[右波線(朱)]

ほつゝしめ縄(9オ)

歌六四「ほつゝしめなは」[左傍点(朱)]・「しめなは」[右波線(朱)]

芽ぐむ(9オ)

歌六五「めくむ」[左波線(朱)]

○／あたりの空(9ウ)

歌七〇「あたりの空に」[右波線(朱)]

心まとひ(9ウ)

歌七三「心まとひに」[右傍点(朱)]

花の夕ばえ(9ウ)

歌七四「花の夕はへ」[右波線(朱)]・「夕はへ」[左波線(朱)]

風の祝(9ウ)

歌七五「風のはふり」[右傍点(朱)]・「風のはふりに」[左直線(朱)]

花にむつるゝ虫(9ウ)

歌七六「むつるゝ」[左波線(朱)]「花に」に記号ナシ

真木綿の／ぬさ(9ウ)

歌七七「まゆふのぬさを」[右傍点(朱)]

八重かさなれる花(10オ)

歌七八「ぬひめなく八重かさなれる花」[右傍点(朱)]・「八重かさなれる

花「左波線(朱)」

谷ふところ(10ウ)

歌八三「谷ふところに(谷ふところにこかくれて?)」「右傍点(朱)」

八重桜(11オ)

歌八八詞「中宮の御堂の八重桜」「右傍点(朱)」・「御堂の八重桜」「左直線(朱)」

初めに述べたように、朱の頭書には、ほぼすべてにその下の家集本文に該当部分がある。しかしその記号は一定でない。これは既に見たように記号が恣意的であることを意味するが、一方で記号がどうであれ、傍線で示した三つの例外、「ゑごのうねは恵具の生たる田のうねにや」(4オ)、「正月十五日粥」(5ウ)、「紅梅」(8オ)を除いて、朱頭書は家集本文の和歌か詞書の記号を付された部分に対応している、そこにその言葉そのものがあるということがはつきりする。例外のうち、「五月十五日粥」、「紅梅」は直接対応する言葉はないけれども、詞書を概括的に指しているものである。「ゑごのうねは恵具の生たる田のうねにや」は語句の解釈、いわば注釈、になっているのが特殊であるが、これを例外として、朱頭書はすべて本文の語句を抜き出したものであるということになる。

これらは明らかに「見出し」であろう。家集本文の記号を付した部分からさらに選ばれた語群が朱で頭書される形式で、それは辞書の見出し項目と用例との関係に等しいものである。〇―のあるものとなないものとの違いは明らかでないが、この記号があることも見出しであることを裏付けるだろう。あまりに煩多に付けられた本文の記号の中に言葉が埋もれてしまうのを避ける意味があったものと考えられる。

つまり、ここまでとりあげた本伝本の書込みは、下の本文部分の記号類は家集本文を言葉に分解したもの、上の頭書はその中の重要な語を抜き出したものである。実際の書込みもこの順に行われたと考えるのが自然であろう。すなわち、言葉拾い上げる作業として、上下でいわば一つのシステムをなしているというこ

とができる。そして、実はこれは索引のための与清のシステムなのである。この理解は可能性の一つにすぎず、恣意的にすぎるかもしれない。しかしながら、小山田与清という人物とその書物への対し方を見れば、これらが与清の作業と考え、て全く矛盾のないものであるということである。逆に言うならば、この伝本が与清の作業の「場」であり、その「跡」であることもまた認めてよいものである。

二一三

与清の作業について一つの例をあげてみよう。早稲田大学図書館の特別資料室には小山田与清の自筆校本や書入れ本が収められているが、その中の一本、「狭衣物語」(函架番号 12 04874)である。この本は無刊記古活字版で、巻首に「田安府芸台印」、「献英楼圖書記」、「此君精舍藏印」(巻尾にも)、「伊藤文庫」、「横山重」、「天泉宋今」、巻尾に「梅華艸堂珍書雲烟過眼之記」とあり、流転を重ねた本だが、一時与清の手にあつて与清筆の様々な書込みと傍線の類が見られる。これらは南部家旧蔵本群書類従本「散木奇歌集」と同じ体裁の本文の傍線、傍点を持ち、校異や注と頭書、標注を朱、墨とままた藍墨によって書き込むものである。「散木奇歌集」よりも少ないけれども、同じように行の左右に施され、重複もあり、なおかつ地名、名所の類の記号は直線である。人物には中線があるところは違うが、南部本「散木奇歌集」と同じと見てよい。朱にはやや明るいものと暗めの色との二種あつて、傍線、傍点にもこの二種が使われ、やや大振りの字で書かれる頭書は細字の標注に対して暗い朱で書かれて、頭書に相当する本文部分に同じ色の記号があるのを見ることが出来る。この大きな字の方が南部本「散木奇歌集」の上欄外の朱の頭書に相当するものである。なお、標注には契沖、村田春海、賀茂季鷹、間宮永好など、与清に関わりのある人物の名があり、小山田与清筆書入れと見る状況的証拠となる。同時期に存在する人々ではないので、注を引用したり見解を聞いたたりしたものであるらしいが、この中に与清の名はなく、注自体が与清のものであると考えるのが自然である。

二一四

その与清の作業は、先に「見出し」と書いたが、その先に「索引」を予定したものであり、当該部分の抜き出し、あるいはそれを用いた考証に備えるものであった。^(注十七)「散木奇歌集」の朱の頭書の言葉のいくつかは例えば「松屋筆記」に見出すことができる。一部ではあるが、「松屋筆記」と南部本の該当する部分とをあげる。^(注十八)「散木奇歌集」に関わるところに傍線を引いた。

「松屋筆記」散木奇歌集の引用

- ・みそうづ 散木集隠題の部に田上に侍りけるころもりがいねといふ物をもちひにしてとり出て侍りけるをまたの日みそうづにして侍るを見てよめる
「ほうしこのいねと見しまにもちぬれはみめうつまても成にける哉」と見えたるみそうづは増水の事也撮壤食物部に曾水をみそうづとよめるにてしるべし
みそうづは沙石集にも見え増水は節用集運歩色葉集などに出たりみそうづは味噌水の義なるべし漿をコンヅといふも似たる詞づかひ也此考は萩野長が問に答し也 尺素往来七日のみそうづ (巻四一十二)
- ・糶汰 沙石集四の巻道人可捨執着事の条に(中略)下学集飲食門に増水糶也云々と清曰糶は糶と通ず増水は節用集にミソウヅとよみたりみそうづは俊頼の散木集沙石集などにも見ゆ今のぞうするといふものはもと糶汰をもて製りしこと知べし(下略)(巻十四一七十六)
- ・目路と云詞 メジ 同集 四の 巻に秋の夜の月いといたくもりたるに「なかわれとめちにも霧の立ぬれは心やりなる月をたに見す」按に此めぢてふ詞は俊頼の歌にもよみてそは袖中抄にも引たり目路の義にて目のかよふほどをはるかに見やる心也(巻五一卅一)
- ・名をかくしてよめる歌 忠見集にはじめて召あげられけるに「君か代にさかくくへしとおもひせはしらまし物をたゝみねの道」此歌忠見といふ名をかく

してよみ入たり俊頼の散木集にもとしよりとよみたる歌あり頼政の歌に「ひをけさいかによりまさるらん」とも有此外おほかり曾丹集長歌にも「名をよした」と名づけつゝ、とあれどこれはかくしたるにはあらず。(巻八一三)

・おしね おしねはおそ稲の義にあらずおほそへ字にてしねといふべきをさいふ也と師錦織翁の説なりされど夫木抄冬三安元元年十月右大臣家歌合初雪清輔朝臣「おしねかるしつのすかゝ白妙にはらひもあへすつもる雪かな」此歌判者清輔朝臣云田は秋ことかる物にとあるを雪ふらん時はいかゞなど申人ありしかども其は僻事也十月にかる所おほかりおしねと云はおそき稲なればかきあひてこそ侍れと云云按に此説によれば晩稲の事也さては「おしね」と書べし「オソイネ」の略也 散木集秋に「うき身には山田のおしねおしこめて世をひたすちうにうらみづるかな」これもおしねおしこめてとつゞけたり (巻十一一十五)

・ざりせばと云てにはの格 散木集三に月のいらんとするを見てよめる「月み

れはすくな御神そうらめしき西には山をつくらざりせば」此歌下によからましといふ詞を余情に添て心得べし一ツの変格也(巻十一一卅五)

・はゞかる 散木集釈教部に仏の御したはひろく長くしておほ空になんはゞかるといふことをよめる「みそらにも吹かよふらしおほくちのまかみか原のこのした風は」云々又阿弥陀仏の御身は世中にみちてはかりうべからずといへることをよめる「わたの身もあまつみ空には、かりてよもせはしとやおもひしるらん」云々右の詞書と歌とははゞかるといへるは今俗言にはだからといふとおなじ心に用たり憚の字の心にはかなはずニクマレモノ、世ニハゞカルなどいふははゞかるとおなじ 盛衰記廿六ノ十五丁オ坪ニテハバカルホドノ大頭ニテ云々 (巻十二一)

南部本散木奇歌集の該当部分(なるべく原態に近く示した。ゴシック体は朱頭書、波線は右波線、網の部分は左波線、直線は右直線、●は傍点、○は圈点、表記にくいものは注で示し、傍記等は省略した)

田上に侍りけるころもりがいねといふ物をもちぬにしてとり出て侍りけるをまたのひみそうづにして侍るを見てよめる

ほうし子 ほうしこのいねとみしまにもちぬれはみそうつ迄もなりにける哉
みそうづ

*和歌中「みそうづ」は右に傍点及び圈点を二重に付し、「そうづ」の部分左に傍点

目路^{メヂ} とへかしなたまぐしのはにみかくれてもすの草くきめちならすとも
伊勢に侍りける比たよりにつけて修理大夫のもとにつかはしける

*「草くき」の部分左波線（あるいは点）

殿下にて卯花をよめる

名をのみ うの花の身のしらかとも見ゆるかな賤かかきねもとしよりにけり

*「うの花」の部分傍点にも見ゆ、「としよりに」の左に「年老^{ヨロ} 俊頼ヲソフ」と傍記

田上にてたかるをみてよめる

おしねおし

こめて うき身には山田のをしねをしこめて世をひたすらにうらみつる哉
ひたすら

*「をしね」は左に「お」と朱書にて訂、「おしこめて」左に朱圈点

月のいらんとするをみてよめる

西には山を

つくらざり 月みれはすくなみかみそうらめしきにしには山をつくらざりせは

せば

*「にしには山をつくらざりせは」は左に朱傍点、「ざりせは」に「さらまし」と傍記

仏の御したはひろく長くしておほ空になんは、かるといふこと
とをよめる

はゞかる みそらにも吹かよふらしおほくちのまかみか原のこのした風は

（墨頭書）「万葉／大口ノ真神カ原ニフル／ユキハイタクナフリソ／イヘモアラナクニ」

*「まかみか原」は左右ともに直線

南部家旧蔵群書類従本「散木奇歌集」の輪郭（山田）

阿弥陀仏の御身は世中にみちてはかりうへからすといへる

はゞ 事をよめる

かりて

みたの身もあまのみそらには、かりてよもせはしとやおもひしる
らん

先の「狭衣物語」と南部本「散木奇歌集」との類同は、同じ一人の人が行った結果と見なければならず、この「松屋筆記」の項目なども参照すれば、それは小山田与清の仕事であるということになるであろう。

従って南部本遊紙の「与清曰」以下は小山田与清の識語であり、伝本内部も与清の仕事であり、それが与清筆でないのは、もと同じもの、すなわち類従本に与清自身が書込んだ原本があつて、それを後人が同じく群書類従を用いて複製したからであるということになるであろう。これが南部家旧蔵群書類従本「散木奇歌集」の由来である。

三

与清は少なくとも写本と群書類従本と二種の「散木奇歌集」を手にしていた。^{（注十九）}
その小山田与清書入れ類従本そのものが存在することは、実は既に関根によつて報告されている。^{（注二〇）}すなわち、「静嘉堂文庫蔵散木奇歌集」、いわゆる問宮本、の項に、

十卷三冊本で次の奥書を有する。

散木集十卷以師翁写本書写之維時文政十年晚秋下旬命重賢書写之而后再三
校合了至初冬望後落成以識其由 源輅

以師翁校本一校畢^{此本今} 水戸家へ献上彼御文庫ニアリ

文久二年三月廿八日功畢

問宮永好

これによれば、源轅が師翁蔵本を以て文政十年書写し校訂を加へた本で、これを間宮永好が入手して更に彼の師小山田与清の校本により校異を書入れたものである。即ちこの本は書写は轅、校異の書入は轅と永好とによつてなされ、永好の書入は小山田与清校本に拠るのである。そして第一冊見返の永好の識語には

墨と朱とを以て傍に書けるはもとより此本にありける也 サと記せるは故翁本に藍を以てものせる也 イと記せるは異本也 △と記せるは故翁校本に書名なきもの也 ルと記せるは群書類従 墨と記せるはル の異本也 ○と記せるは墨にて故翁本に校せる也但書名をあげず □と記せるは故翁本に墨にてイと記せる本

とある通り、当本は永好入手以前と覚しき墨朱書入とサイ△ル墨○□に符分した校異を示し、外に契冲本と記入した補入歌の書入もあるが、右見返の識語によれば師翁校本の本文は書入てゐないのは不審である。所が彰考館には、小山田与清が和装群書類従三冊に書入校合を施した散木集が蔵されてゐて、この書入は轅本になした永好の書入と全く一致するので、永好の云ふ師翁本とはこの与清の書入類従本であり、従つて与清本の本文は群書類従なることが判明した。なほ永好は与清の註記考証をも写してゐるから、この永好本は、居乍らにして与清本をも見ることが出来るのである。但しどういふわけか永好の書入は祝部あたりまでで中止し雑の辺から又始まつてゐる。与清本にはこの間も継続してゐるから、中絶の分は与清本を以て補ふべきである。

因みに、新校群書類従の散木奇歌集解題^{第十一卷 三十四頁}は、間宮本散木集について記したあたり頗る明瞭を欠いてゐるが、間宮本とは上掲の奥書を有する現在の静嘉堂文庫蔵本で、松井簡治博士旧蔵本であり、前述のごとき本なのである。そして「水戸家へ献上」した本とは与清の書入類従本のことである。

とある記述である。間宮永好は与清の門人であり、この経緯は自然なところであ

(注二十一)
ろう。

ところが、これは謎の伝本であつて、この群書類従本は現在行方不明である。平澤五郎によれば、「現在、彰考館文庫訪書の際、該群書類従本につきお伺いたしたところ、当該書は見あたらず、その詳細の検討は不明」である^(注十二)。しかし、関根はこの本と間宮本の本文を比較した上で、「永好の書入は祝部あたりまでで中止し雑の辺から又はじまつてゐる」が、「与清本にはこの間も継続してゐる」というので、実見したことは確かであろう。^(注十三)『散木奇歌集の研究と校本』は一九五二年の出版だが、調査は戦前に行われており、あるいはその頃には見ることができたのかもしれないが、彰考館図書目録 附焼失目録^(注十三)にも記載がない。さらに、平澤論文は「国立国会図書館蔵文政十二年内藤広前写・岡田希雄校合書入本」、関根のいう「岡田本」について、

文政十二年十二月九日から同月十七日にかけて内藤広前の書写するところの本を手得した岡田希雄が後述の書入本を主とした校合・書入れを移写し、自らも又追補増訂した、それが本書の経由である。(中略)

まず、本書の本文は、さきの内題・各部立にも見るごとく群書類従本からの転写であり、各冊編成、同丁数、行数・字詰をも同じくする。(中略) 該本の模写とも云うべき書写状況を呈している。(中略)

しかし、本書の校合にも見てきたごとく此の岡田希雄の手跡書入れの過半はさきの間宮永好校合本の書入れと同じくして其の依拠するのはやはり共に小山田与清本であろうと推定されるのである。既に該書書入れにて言及したが、本書の書入れには「永好曰」の附注を一切見出さないところから校異移写と共に永好校合本ではなくして或は直接に与清校合本、又はその転写本などに拠つたものであらう。

(注十四)
という。岡田希雄本もやはり複製群書類従であり、その他の注を含むけれども、結果として、与清書入れ本群書類従になっているというところであらう。そうすると岡田も同じく「与清校合本、又はその転写本」を見たわけで、それがどこにあったのか、関根が見た本と同じなのか違うのか、これも謎なのである。

それはともかく、間宮本の書入れが与清本のものであるとすれば、南部本群書類従の書入れとも一致するはずである。すでに上掲平澤論文は間宮本の欄外注書入れについて六例をあげて岡田本と比較し、「本書と岡田本との附注は相互によく一致し、例示以外の全巻―但し本書巻五―八の間、書入れを欠く―も過半を共通し、其の源は小山田与清校合書入本に発するとみるほかはない」との結果を示しているが、これに倣って南部本との比較を試みたい。次は南部本の上欄外の墨書書入れ（26のみ朱）であり、その内容は標注である。^{（注二六）}

これまでの記号類と同じ部分について、最初にゴシック体で南部本の注を掲げ、その注にかかる歌の新編国歌大観番号を付す。次に間宮本にあればその本文をあげる。ない場合には×を付けた。間宮本にあつて南部本にないものも同様の処置をした。なお、一部大野広城本との類似も見られるので、これも加えたが、その場合大野本である旨を注記し楷書体で示した。注の初めにある○と句点は本のまま、／は改行を示すために私に付したものである。^{（注二七）}

南部家本の上欄外墨書書入れ

4 此力、ミハ次ノ哥ニ云／カ、ミト別ニテ常ノ鏡／也

×

5 貧道集 立春哥／いつしかと末のまつ山／かすめるはなにとゝも／にやはるのこゆらん／教長卿は聊後輩ナレハ／此散木ノ哥ヲトレルト／モ云ヘケレトサアラシ／全暗合ト云ヘシ

○貧道集 立春哥／いつしかと末の松山かすめ／るはなにとゝもにやはる／のこゆらん教長卿は聊／後輩ナレハ。此散木ノ／盗めりともいふべけれど。さはあらし。暗合なるへし。

6 用ハモチヒノ仮名ナル／コト経衡集ニモ二首／ヨメル証アリ

○用ハ。モチヒの仮名な／らぬ事漢語音図／に論あり。可従。／経衡集にもモチヒの仮名の証となる哥／二首あれど。なほモチヒ歟モチキを可用也。

6 永久百首元日／俊頼／けふよりは我をもち／ひのますかゝみうれし／きかけをうつしてそ／みる

○永久百首。元日。俊頼。けふよりは我をもちひのます鏡うれしきかけをうつしてそみる。

佐保

8 頭句ハ棹ニヲ云カケタレト／カンナタカヘリサレトイトハ／ヤクヨリ誤キタレリ天喜二／年四月蔵人所哥合紅／葉^誤／今はたゝもみちのにしき／たつた姫染かけつらん／さほの山へに

金葉三にもさほ川のみ／きはにさける蘭波の寄／てやかけんとすらん又清輔初学抄にさほ山／棹ニソフとあれば既ニ此比／ハ云カケニモチヒタルコトウタ／カヒナシ

○永好曰。佐保山を棹にいひかけたるは。／天喜二年四月蔵人所哥合紅葉^{よみ人}しらす／今はたゝ紅葉の錦たつた／姫染かけつらんさほの／山へに。清輔初／学抄。さほ山。棹ニソフとあれば。此頃／より専になれる歟。

「大野本書入」

頭句は棹^{佐保}をいひか／けたれと仮名違へ／りされどいと早く／より誤来れり／天喜二年四月蔵人所／歌合紅葉読人不／知いまはたゝ紅葉の／にしきたつた姫そめ／かけつらんさほの山／辺に金葉三にも／さほ川の汀にさける／蘭波のよりてや／かけむとすらん又清／輔初学抄にさほ／山棹にそふとあれ／は既に此頃はいひか／けに用たる事うた／たかひなし

10 袖中抄^{テキマ}云此哥ヲハ俊頼／霞とてヨロシキ哥と申／ケリ仍左京兆モ詞花集／ニモ入タリ

是ハ松ノシツエヲ蜘蛛手トハ／橋ノ柱ニツヨカラシ／為ニスチカ／ヘテウチワタシタル木ヲ云也

○袖中抄。此哥ヲハ。／俊頼霞とてヨロシキ哥と申ケリ。仍左／京兆モ詞花集／ニモ被入タリ。是ハ松ノ／シツエヲ蜘蛛手トハ。橋ノ柱ニツヨカラシヲ為ニ。スチカヘテウチワタシタル木ヲ云也。

12 古今二十／真金ふく吉備の中／山おひにせるほそた／に川の音のさやけさ
○古今廿／真金ふく吉備の／中山おひにせる／ほそ谷川のおとの／さやけさ。

17 アシミハ足踏ノ中略／ナルコト下文尺教ノ部ノ哥ニテシラル考可合

○あしみハ足踏の中略なる事。下文／釈教の部の哥に／てしる可考合
19 此歌三ノ句ヲ初句の／上ヘマワシテミヘシ／四句ヘツ、ケテハ聞工／カタシ

20 類聚名義抄部笛^{蓋簿}エヒラ云々

○類聚名義抄竹部笛^{蓋簿}／エヒラ云々。

21 下ノ句ノ意ハカコチコトノ／意ニテ子日シテ行末ノ／ヨハヒヲ祈ソノネキ
コトラ／ハ只神慮ニマカスト云也

25 ケフサヘ^ハト云ルニ／浮身ノ愁アルヨシヲコ／メテヨメリ若ナナド／ツミ
テ面白野遊スルケフ／サヘ袖ノヌル、ヨシ也

○けふさへ云々。と／云るに。浮身の愁／有由をこめて／よめり。かく
わかな、とつみて面白き／野遊するけふさへ袖のぬる、よし也。

26 ゑごのうねは／恵具の生たる／田のうねにや（この項朱）
故翁曰。ゑこのうねは。／恵具の生たる田の／うねにや（間宮本に「故
翁」とするのはこの一例のみ）

27 類聚名義抄^{イシミ}笥

類聚名義抄。笥^{イシミ}

31 後漢書礼儀志

32 夜コシハ俚ニ云ヨイコシ／ニテ前ヨニツメルヲ云本／行ノ花トアルハヨシ
ナシ／両本トモニハツホトアルカタ／シカルヘシハツホハ初穂／ニテ初物
ナルヨシ也

ソレヲ送マキラスレハ賞翫シタマヘト也／後拾遺正月七日周防内侍の許に
遣し／ける^{（アキマ）} 藤三位／数しらすかざる年を鶯の声するかたのわか
もかな

○夜ごし云々。俚に云。よひごしに前日つめるを云。本行の花とあるは
よしなし。両本ともに。はつなとあるかたしかるへし。はつほは。初穂
にて初物なるよし也。／それを送り参らすれば。賞翫したまへと也。後
拾一正月七日周防内侍の許に遣しける。藤三位。数しらす重なる年をう
くひすの／こゑするかたのわかなくもかな。（この項この丁の右端余白
に記す）

「大野本書入」

後拾遺一正月七日／周防内侍の許に／遣しける 藤三位／題しらすか
ざる／年を鶯の音する／かたの若なくもかな

37 馬毛ノ誠ニ緑ナルニハ／アラネト白ハ青ニ色ノ／カヨヘハカクハ云ツ、ケ
タ／リ

38 ×

○永好曰。七種粥ハ正月十五日食ふもの／にて其品々式にあり。是をあ
かき粥と／いへるは。此比は七種はすたれて米と餅米／と小豆などにな
れるにや。枕草子に餅／かゆのせく云々。とみゆるも此十五日の粥／の
事也。この哥にもち月といへるも餅をかけたる也。

42 我方ハイト、シミコホリテ春トモ覚／エヌヲ衣手ノウスキノミサス力冬ヲ
ヘタツル／シルシナント也

○我身はいと、しみ／こほりて。春とも覚／えぬを。衣手のうすき／の
みさすが冬をへたつるしるしならんと也。

45 古写本のニホフラント／アルカタヨロシカホルラ／ニテハ調ワロシ（歌末
に「にはふイ」と墨傍記）

○古写二本ともにほふ／らん。と有かたよろし。／かをるらんにては調

わろし。

47 数ならぬミヲハウクモヘ／トモ我哭音ヲハメツル人モ／ナシト述懐セリ

○数ならみ身をは／うくおもへども／我哭音をば。めつる／人もなしと述懐せり。

62 後拾十五 永胤法師／いつかたへゆくとも月のみえぬかな／棚引くもの空になければ

○後拾集十五。永胤法師／いつかたへゆくとも月のみえぬ哉棚引／くもの空になければ。

〔大野本書入〕

後拾^五 永胤法師／いつ方へゆくとも／月のみえぬかな／棚引雲のそらに／なければ

63 拾遺 読人不知／花見にはむれてゆけ／とも青柳のいとも／とにはくるひともし

×

〔大野本頭書書入〕

拾遺 読人不知／花見にはむれてゆ／けとも青柳の糸／のもとにはくる／人もなし

71 ○万葉に引哥／石見の海うつたの／山の木間よりわかふ／る袖をいもみつらんか（歌七一「まつら」の左に「うつた」と墨傍記）

○万葉に引哥／石見の海うつたの山の／木の間よりわかふる／そてをいもみつらんか（左に小字で「イニアリ」と傍記）

74 献芹の故事八童蒙抄二／俊頼抄等二／委

○芹つむ事／童蒙抄、俊頼抄。

〔大野本書入〕

献芹の故事は童蒙／抄□□委

75 此哥ノコト袋草子二／委見

○此哥の事袋草／子に委。

〔大野本書入〕

夫木洞院摂政家／百首／しなのちや風の／はふりに心せよ／白ゆふ花の匂ふ／神垣／家長朝臣

76 新撰朗詠 佐国／六十余回看未飽他生定作愛花人

○新撰朗詠。佐国。／六十余回看未飽。／他生定作「愛花人」。

88 本行くるハ上ヨリつるヲ／ツゞケカケル誤也つるト／アル本ソタゞシキ

（歌八八「くる」の右に「つゝ」と墨傍記）

○本行。くるは上より／つるをつゞけかける誤／也。つると有本そた、／しき。

〔大野本頭書書入〕

本行くるは上より／つるをつゞけかけ／たる誤也つると／ある本そ正き

全二十八例のうち、南部本にあって間宮本にない注は五例、南部本に見られないが間宮本にあるのが一例で、異なるものもあるものの、文言は勿論、仮名や漢字の用字にいたるまで同様のものが目につき、全体に大変よく一致しているということができる。南部本になくて間宮本にある一例には「永好曰」として自注であることを示していて、間宮本から南部本（の原本）へという注の転記は考えられない。また、ここにだけ特記された理由は分からないけれども、同文の注（26）に間宮本が「故翁曰」とするところがあるから、明らかに南部本の注は小山田与清のそれと知られるのである。大野本は契沖本を祖本とし清水浜臣らの注を書き入れたりもしているから、共通するものはその辺りの事情により、与清原本の注には与清のものでないものもあるのだろう。ともあれ、間宮本は、南部本群書類従と同一内容の与清校本群書類従をもって校合書入れし、その注を移植し、自注を付加したものと考えることができる。「此本今水戸家へ献上彼御文庫ニアリ」というから、南部本群書類従原本の与清手沢群書類従本が確かにあつたのは確実である。

南部家旧蔵群書類従本の「散木奇歌集」の内容の一部を紹介しつつ、半ば明らかであると言ってもいい「与清」識語が小山田与清のものであることを確認し、識語のみが写されたということではなく内容もまた与清のものであることを述べ、またその書入れの意味の一端を明らかにしようとしたために、首尾簡とも整理されたものになった。

既にまとめる必要もないが、繰り返し述べたように、南部家旧蔵群書類従本「散木奇歌集」は、小山田与清がかつて所蔵し種々の書入れを行った群書類従本の複製であり、内容としてその本そのものであるということである。水戸家に献納された与清本の所在が不明である今、それを「居乍らにして見ることが出来る」^(注二十九)のである。

本書の閲覧と写真撮影を許された盛岡市中央公民館、小山田与清旧蔵書の閲覧を許された早稲田大学図書館と特別資料室に謝意を表する。

また、本稿は、井上宗雄、小峯和明、高橋昌彦、中野三敏、松本智子、宗像和重の教示と高配とによって成ったものである。これも記して謝意を表したい。

本稿は、「古典研究会」と「日本語・日本文学の総合研究」(総合科学研究チーム)の合同研究会(二〇〇八年二月七日 福岡大学)において、「〈種蒔く人〉小山田与清」として口頭で発表したものの一部である。

注

- 注一 関根慶子『散木奇歌集の研究と校本』(校本の本文は群書類従本)(一九五二 明治図書出版)、同『中古私家集の研究 伊勢・経信・俊頼の集』(一九六七 風間書房)

注二 関根慶子・大井洋子『阿波本 散木奇歌集 本文・校異篇』(一九七九 風

間書房)

- 注三 関根慶子『散木奇歌集 集注篇 上巻』(一九九二 風間書房)、関根慶子・古屋孝子『散木奇歌集 集注篇 下巻』(一九九九 風間書房)、関根にはまた「悲歎部」のみの注、『平安鎌倉私家集』(日本古典文学大系80 一九六四 岩波書店)の「大納言経信集 附 散木奇歌集第六悲歎部」がある。

- 注四 平澤五郎『散木奇歌集伝本考(一)』(一九八八「斯道文庫論集 第二十三輯」、平澤五郎『散木奇歌集伝本考(二)』(一九九二「斯道文庫論集 第二十七輯」)

- 注五 財団法人冷泉家時雨亭文庫『冷泉家時雨亭叢書 散木奇歌集』(解題川村晃生)(一九九三 朝日新聞社)

- 注六 例えば、顕昭所持本、美福門院加賀筆本、狩谷校斎本、清水浜臣書入本、小山田与清旧蔵本、群書類従本の校合本の織部正乗尹本や、岩手県立図書館蔵の黒川盛隆筆本(函架番号 新099/K32)など。

- 注七 このことはただちに群書類従写本(和0178)が群書類従本(和0178)の写であることを意味するわけではない。なお後述する。また、以下南部家旧蔵群書類従本「散木奇歌集」、またこの二本については適宜略記する。

- 注八 明治三二年(一八九九)刊。未見。南部明子『常磐園集』(一九〇六 太田時敏)本居豊頼序、太田時敏跋(国立国会図書館 近代デジタルライブラリによる)、『盛岡市史』第八巻「再続人物志」(太田孝太郎)(一九八二復刻版 盛岡市)。

- 注九 明治三九年刊。南部明子(太田時敏編)『常磐園集』(一九〇六 太田時敏)太田時敏跋(国立国会図書館 近代デジタルライブラリによる)。なお、太田時敏は当時の南部家家令である。

- 注十 「五部合集」、「栄花物語拔書」ともに国文学研究資料館の紙焼写真による。

- 注十一 注八『常磐園集』の序跋。

- 注十二 写本は南部明子筆である可能性がある。

- 注十三 写本の方は、いくぶん与清筆に近く感じられ、その趣を残しているよう

に思われる。なお、小山田与清は享和三年（一八〇三）、二十一歳の時に高田家の養子となり、文政八年（一八二五）四十三歳で本姓の小山田に復して名を将曹と改めるのであるが、本稿では通行の小山田与清を用いる。筆者は、与清の日記「擁書楼日記」や群書類従の刊行状況から、以下に述べる与清の書入れは高田姓の頃であろうと考えている。

注十四 彰考館蔵のいわゆる小山田本や早稲田大学図書館の小山田与清旧蔵本などに与清自身の筆によるその様相が展開されているのは周知のことであろう。

注十五 煩瑣だが、ある程度の分量が必要なので第十一丁までとした。第十丁までもよいのであるが、第十一丁に考察のたよりとなる部分があるためである。上欄外の書込みについては後述する。

注十六 群書類従と群書類従写本とは、記号の位置は一致しながら点、線の種類が異なるところが見られるので、この点からも記号の違いによって何かが種別されているという可能性は少ないかと思われる。

注十七 いわゆる「抄録」や「類字」である。与清が最終的に作成しようとしたのは「群書搜索目録」。この索引と索引システムについては、「松屋筆記」に与清自身の言があるが、清宮秀堅『古学小伝』（一八五三・安政四年稿）一八八六刊 国会図書館蔵再版 一九〇三による）、清水正健『水戸文籍考』（一九二二 須原屋書店）、天野敬太郎「小山田与清と「群書搜索目録」」（天野敬太郎著作集『書誌索引論考』一九七九 日外アソシエーツ）、岡村敬二「小山田与清の類字函」（一九八八「大阪府立図書館紀要」第二十四号）、同「蔵書家の視界——小山田与清と擁書楼——」（横山俊夫編『視覚の一九世紀——人間・技術・文明』所収 一九九二 思文閣出版）、同『江戸の蔵書家たち』（講談社選書メチエ71 一九九六 講談社）などの論考がある。また索引とシステムそのものも一部残っている。言うまでもなく、こうした索引は一人与清のみのものではなく、多くの和学者によって作られ、彼らの学的基础であった。伝本も多い。

注十八 本文は自筆本の翻印である国書刊行会本『松屋筆記』（市島春城校 三冊 一九〇八）による。括弧内はその頁数と項目の番号、傍線は筆者による。

注十九 「松屋筆記」の考証には写本と群書類従本両方からの引用がある。その項目の排列の順がどのようなものであるのかは分からないが、群書類従本の引用はその後半に多く出るようである。「松屋筆記」は注十八の国書刊行会本による。早稲田大学図書館の特別資料室には国書刊行会本翻印刊行当時所在不明だった部分があるが、筆者はまだその全部を見ていない。また、静嘉堂文庫蔵間宮本の奥書と間宮本それ自体もその証である。注二十一参照。

注二十 注一に同じ。

注二十一 間宮永好は字、叔芳、通称、一郎また又左衛門。与清と同じ「松屋」を称した人である。清水正健『水戸文籍考』（一九二二 須原屋書店）には「間宮松屋」と立項して、「小山田松屋の門人にして。其の雅号を襲ぎ。亦松屋と云ふ。天保中進仕。倭書局に入り。編集に任ず。後出でて朝廷に仕へ。明治五年没す。年六十八」とある。

与清の『松屋叢考』の「三絃考」の奥に「文政九年六月 門人 江戸 間宮叔芳／林堯臣 同校」とあり（『日本随筆大成』新装版〈第一期〉第16巻 一九九四 吉川弘文館 による）、小山田与清「後樂園拜見記」に「年号名を天保九年といふとしの五月の廿六日に、小石川の御館の御島山をみよとの仰せありければ、未の時許、久米彦助、西野新治、間宮一郎、などともなひて、御苑、内に入る」とある。これは間宮永好が浄書し、その後与清が校正した一冊で、奥に「小山田将曹平与清上／門人間宮一郎源叔芳謹書」と記す（早稲田大学図書館蔵 函架番号ナ0403391）。

なお、源頼は渡辺孫右衛門。同じく与清の門人である。高田家旧蔵「松屋升堂名簿」（早稲田大学図書館蔵 卷二のみ存 函架番号ヌ050542）に「文政三年庚辰秋九月二十五日／渡辺孫右衛門／源頼（花押）」と自署する人物で、与清の「倭学戴恩日記」（浄書本 高田家旧蔵 早稲田大学図書館蔵 函架番号ヌ0605739）には数箇所渡辺頼として見え、「寄合衆／字孫左衛門」（天

保二年九月十四日条」と注記されている。平澤五郎「散木奇歌集伝本考(二)」(注四)に未詳とする「源轅の記」「師翁」「松舎」は小山田与清であろう。

注二十二 注四の平澤五郎「散木奇歌集伝本考(二)」なお、「潜龍閣蔵書記」印のある「松屋蔵書目録」(高田家旧蔵 早稲田大学図書館蔵 イ02 02309 卷末に識語「右小山田与清翁俗称外記字文 備号 知非斎 別号 松乃舎」)／水府君江献本之目録七卷者／同藩豊島源次郎記也／各冊ニ御蔵書印有之」の「第四百四十七号」には「散木集 十」とあるが、松本智子の教示によれば、この部分には明らかに群書類従である家集がまともっており、「散木集 十」はその直前にあるので、これが群書類従本である可能性があるということである。

注二十三 注一の『散木奇歌集の研究と校本』「後記」

注二十四 注四の平澤五郎「散木奇歌集伝本考(二)」

注二十五 注四の平澤五郎「散木奇歌集伝本考(二)」

注二十六 なお、先に見た朱の頭書は、また行左右の傍線類、記号類も、間宮本にはない。これらが持っていた役割は間宮本において省かれている。必要となかったということであろう。

注二十七 大野本は「大野広城が天保二年十一月書写し、類従本を茶、浜臣其他後人書入を墨で校合書入し、契沖の頭注等を朱で書入れた本」(関根慶子『散木奇歌集の研究と校本』)である。間宮本は『静嘉堂文庫所蔵歌学資料集成』のマイクロ・フィルム、大野本は国文学研究資料館の紙焼写真による。

注二十八 注四の平澤五郎「散木奇歌集伝本考(二)」

注二十九 関根慶子『散木奇歌集の研究と校本』(注一)